

大項目	4	「地理総合」の授業法と小中高の接続教育			
中項目	4-1	地理総合の授業法と「主体的・対話的な深い学び」			
小項目	4-1-2	充実した地理授業実践の扉を開く「主体的・対話的な深い学び」			
細項目 (発問)	4-1-2-1 地域調査学習	持続可能な社会づくりをねらいとした高等学校における身近な地域調査学習の実践プラン			
作成者名	泉 貴久	作成・修正	2017/2021/2023/2024 年	Ver.	1.3
キーワード 5~10 個程度	地理的見方・考え方 持続可能な地域社会 地理総合 ESD 身近な地域調査学習 社会参画 社会形成 科学地理オリンピック日本選手権 地理力				

発問と説明

(1) 新学習指導要領で重視される地理的見方・考え方と「地理総合」のねらいとは何か？

高等学校で2022年度より実施される新学習指導要領(中学校では2021年度、小学校では2020年度にすでに実施)では、グローバル化に伴う社会環境の急激な変化とそれに対応するための資質・能力として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つの柱が打ち出されています。このことは、これまで主流であったコンテンツベース(知識重視)の学力からコンピテンシーベース(能力重視)の学力への転換を意味しています。そして、これらの資質・能力を育成するための「諸事象を捉える視点や思考の枠組み」として各教科において「見方・考え方」が重視されています。

小・中学校社会科、高等学校地理歴史科、同公民科においても、小・中・高の一貫性という観点から「社会的な見方・考え方」の育成が重視されていますが、これは「社会的事象等の意味や意義、特色や相互の関連等を考察したり、社会にみられる課題を把握してその解決に向けて構想したりする際の視点や方法」と定義することができます。地理教育においては、社会的な見方・考え方を「社会的事象の地理的な見方・考え方」として位置づけ、それを「社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること」と定義づけています。また、「地理に関わる諸事象を地域等の枠組みの中で多面的・多角的に考察する力」と「持続可能な社会の構築のためにそこで生起する課題の解決に向けて、複数の立場や意見を踏まえて構想する力」の2つの資質・能力を地理的見方・考え方の柱として位置づけています(泉2018)。

高校地理の必修科目となる「地理総合」においても、表1に示すように、「持続可能な社会づくりに必須となる地球規模の諸課題や、地域課題を解決する力を育む」ことをねらいに、地理的な見方・考え方をベースに課題への探究プロセスを重視した学習項目が設定されています(泉2016a)。いわゆる、「地理総合」は、「現代社会における様々な問題を、各人が自らの問題として主体的に捉え、身近なところから取り組むことで、持続可能な社会を実現していく」(日本ユネスコ国内委員会2018)というESD(=Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)の理念と共通性を持っていると解釈できるでしょう。また、上述したことは本項目で対象とする身近な地域調査学習のあり方ともおおいに関連してくるのです。

(参照 URL 1)

(2) 身近な地域調査学習の本質とは何か？また、その現状はどのようになっているのか？

身近な地域調査学習は、主に学校周辺地域における地理的事象や地理的課題を対象とするため、生徒たちが比較的興味・関心を持って取り組むことができ、また、地域を実感的に把握しやすく、地域の抱える課題に対して当事者意識を持ちやすいといった利点があります。さらに、景観観察、地形図の読図、主題図の作図、調査結果の分析、報告書の作成といった主体的でかつ深い学び、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」が成立しやすく、一連の地理的技能の育成も可能となります(犬井2009)。

竹内(2012)は、地域調査の目的について、「地理的見方・考え方、地理的スキルを学ぶと同時に、地域の抱える課題を見出し、その解決策を探る中で地域社会の形成に参画すること」としており、社会参画学習の一環として地域調査を位置づけています。「地理総合」においても、身近な地域調査学習の該当項目「C. 持続可能な地域づくりと私たち」の「(2)生活圏の調査と地域の展望」のねらいについて、「生活圏の課題を、観察や調査・見学等を取り入れた授業を通じて捉え、持続可能な社会づくりのための改善、解決策を探究する」としており、両者の見解から身近な地域調査学習の本質は、持続可能な社会形成へ向けての社会参画能力を育成することにあるといえます。

しかしながら、従来の学習の多くは、地形図の読図を通じた地域の現状理解に終始する傾向にあり、社会形成、社会参画という視点からの授業展開はほとんどなされなかったといえるでしょう。しかも、地域調査の実施率は、教材収集など事前準備に時間がかかること、観察や読図などの専門的なスキルを伴うこと、生徒の安全上の問題があることなどから概して低い状況にあることも否めません（池 2012）。

（3）. 科学地理オリンピック日本選手権フィールドワークテストにみる「地理力」とは何か？

社会形成、社会参画という観点から身近な地域調査学習のあり方について考えた場合、科学地理オリンピック日本選手権のフィールドワークテストの内容が一つの手がかりを与えてくれるでしょう。以下、そのテストの持つ地理教育的な意義について述べていきます。

フィールドワークテストは、地理的知識・概念がどれだけ身につけているのかを診断するマルチメディアテスト、そして、習得した地理的知識・概念を基にした思考力・判断力・表現力がどれだけ身につけているのかを診断する記述式テストと同様、国際地理学連合タスクフォース作成の「国際地理オリンピック・テストガイドライン」に基づいて実施されています。ガイドラインは、3種類のテスト問題作成の指針となるもので、表2に示すように、そこには求められる3つのスキルと取り上げられるべきテーマとしての12の諸課題が設定されています（国際地理オリンピック日本委員会実行委員会 2018）。

フィールドワークテストについては、「観察と地図化→諸問題の空間的分析→問題解決の取り組み」の3段階からなる探究プロセスが示されており、「観察と地図化」についてはさらに、「観察する→観察した地理的事象に名称を付す→地図上に地理的事象を位置づける→地理的事象を適切な凡例に置き換える→地図上で位置づけた地理的事象について説明する」の5段階からなる探究プロセスが示されています。このことからフィールドワークテストにおいては、「観察」と「地図化」が最も基本的かつ重要なスキルとして位置づけられているものと理解できます（泉 2021a）。

また、フィールドワークテストは、これまでの出題傾向から、①野外での景観観察を通してフィールド対象地域についての理解を深める、②フィールドで把握した地理的諸事象を地図上に丹念に記録する、③地理的諸事象を空間的に分析・考察することで問題を発見する、④地域の特性を踏まえながら問題解決へ向けての具体策を模索する、⑤人間と自然環境との関係性に配慮した持続可能な地域のあり方を考えていく、という一連の探究プロセスに際立った特徴があると判断できます（泉 2016b）。すなわち、地域の現状を把握するための「観察と地図化」に加え、地域の問題を解決するための「価値判断・意思決定」の過程が重視されているのです。（写真1）。

それでは、テスト問題の具体例について見ていきましょう。表3は2015年3月に滋賀県草津市で実施された科学オリンピック日本選手権の三次選抜試験において出題された地図作成テストと意思決定テストを示しています。前者の試験では、旧草津川周辺の地形的特徴・旧草津宿の商業的機能の特性からフィールド対象地域とそこで抱えている課題についての理解の程度を診断するものとなっています。後者の試験では、対象地域における課題を踏まえ、地域住民と観光客それぞれの視点からとらえたオリジナルな地域活性化プランについての策定を求めるものとなっています。すなわち、意思決定テストでは、地域の現状を踏まえて持続可能な地域社会の創造へ向けての具体策について考え、提案するための価値判断力・意思決定力にとどまらず、具体策を実現していくために何をなすべきなのか、それを考え抜く社会形成力が求められているといえるでしょう（泉 2015）。

上述したことから、フィールドワークテストで必要とされる「地理力」について、図1のように整理することができるでしょう。図に示すこのような諸能力は、地域社会の担い手、すなわち市民としての資質を高めていくための基盤となるはずで

（3） 持続可能な社会づくりに関する高校地理における身近な地域調査学習の授業実践プラン

前章で取り上げたフィールドワークテストの内容に基づいて、ここでは、筆者の勤務校の所在地である千葉県松戸市を事例に、フィールドワークと地形図の読図という従来型の学習と、社会形成、社会参画を目的とした問題解決・政策提言型の学習とを組み合わせた高等学校における身近な地域調査学習のプランを提示します（表4）。

この授業プランは、学校周辺地域における野外調査と地形図作業で培った地域認識を基盤に、地域問題の解決、地域政策への提言を志向したもので、参加型・協働型学習をメインに構成されています。新学習指導要領の掲げる3つの資質・能力を踏まえた学習目標は以下の通りです。

図と表のページ

表3 2015年度科学地理オリンピック日本選手権三次選抜フィールドワークテスト

<p>【地図作成テスト】</p> <p>問1 旧草津川の横断面図を描きなさい。図中の表記は英語圏の方にも分かるようにすること。</p> <p>問2 旧草津川から南西側の本町商店街について、土地利用図を作成しなさい。</p> <p>問3 フィールドワークで歩いた範囲を説明する時のキーワードを3つ考え、それぞれ日本語と英語で答えなさい。</p>	
<p>【意思決定テスト】</p> <p>問1 Sauce Book（資料集）の図1は1999年と2014年の人口ピラミッド（ハーフピラミッド）、図2は草津市内の小学校区の地図、図3は最新の1/25,000地形図を縮小したものです。図1は図2中①～④のどこのものと考えられますか。1つ選び、その判断理由を記しなさい。《日本語で解答》</p> <p>問2 草津市民が旧草津川を有効活用することが可能とされるあなた独自のプランを提案しなさい。《英語で解答》</p> <p>問3 今回調査対象とした商店街が観光客を引きつけ、より魅力的な場所にするために、あなた独自の活性化策を提案しなさい。《日本語で解答》</p>	

泉（2015）より引用。

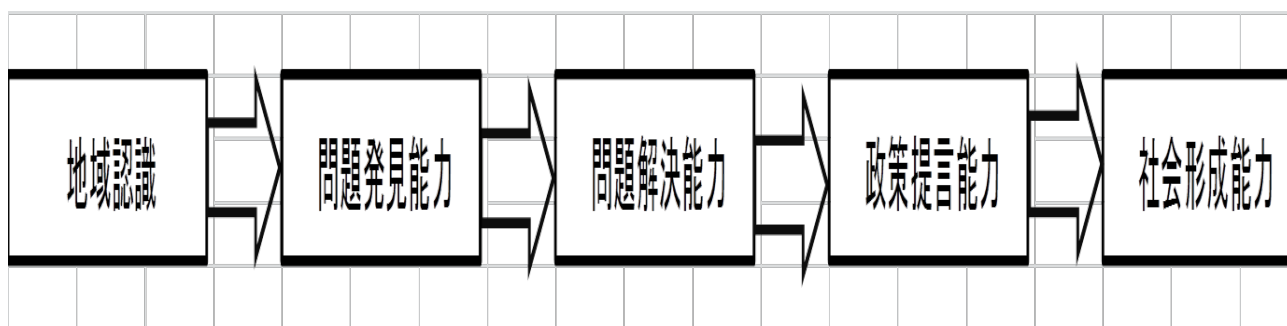


図1 フィールドワークテストで求められる「地理力」
(泉作成)

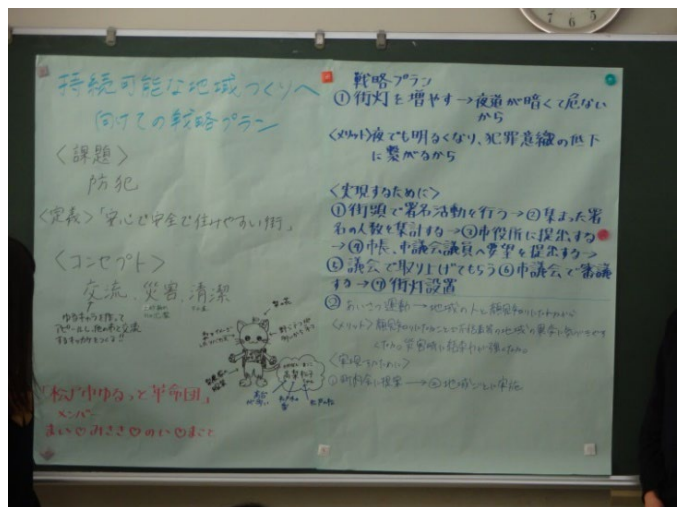


写真2 持続可能な地域づくりへ向けての戦略プランの一事例
(泉撮影)

- ① 地形図の読図やフィールドワークを通して松戸市の概観について地理的・歴史的観点から理解を深める。
(知識・技能)
 - ② 松戸市が抱える諸課題について理解を深めるとともに、その解決策について多面的な視点から考察する。
(思考・判断・表現等)
 - ③ 松戸市の概観や課題を考察するのに必要とされる、景観観察能力や地図などの資料を分析する力を身につける。
(知識・技能)
 - ④ 持続可能な地域社会の実現へ向けて何ができるのかを考える。(学びに向かう力・人間性等)
- 今後は、ここで提案したプランに沿って授業実践を行い、その成果を検証していきたいと思います。なお、実践にあたっては、以下に示す4つの点を踏まえていきたいと考えます。また、実践プランの詳細については、泉(2014)を参照してください。

① 地域認識のより一層の深化

グループごとに松戸市の概要について調査するべく、異なる地理的諸事象をもとにテーマを設定します。そして、テーマに関連した文献を収集し、それを読み取り、討論を行い、結論、発表へと導きます。

② 認識から参加・行動に至る学習プロセスの確立

グループごとに松戸市の抱える諸課題について異なるテーマを設定します。テーマをもとにウェビングの手法を用いて作成された系統図であるウェブマップ(図2)を作成し、諸課題間の因果関係を見出していきます。そして、写真2に示すように、諸課題の現状を踏まえ、解決へ向けての手立てについて考えるとともに、松戸の望ましい将来像についてキーワードを複数設定し、それに基づいたビジョンを構築し、具体的提案を行います。ただし、その成果を地域社会へどのように還元できるのかが課題であるといえるでしょう。

③ 個別学習から協働学習への発展

「異なる価値観を持った人々の集合体」である現実空間を踏まえ、協働の学びの場を設定する必要があります。写真3に示すように、グループ作業やディスカッションを組み込んだワークショップ型の学習を積極的に取り入れていきたいと考えます。ただし、授業時数や受験対策に起因する制約をどう克服するのが課題といえます。

④ ローカルな課題とグローバルな課題とのリンク

松戸の抱える課題(住宅開発、少子高齢化、自然災害、交通渋滞、ゴミ処理など)を国内外の他都市の事例と比較・考察し、世界共通の問題としてとらえることが可能です。また、地域の課題がもたらす影響をより大きなスケールで考察することで、環境・開発などの地球的課題とリンクすることができるでしょう。この面からの教材開発も急務とされます。

図と表のページ

表4 千葉県松戸市を事例にした身近な地域調査学習のプラン
学習テーマ：「足もとから考える地域の課題—松戸市への政策提言—」（全17時間）

学習内容	配当時間	学習活動
松戸市の地理的・歴史的特性	2時間	<ul style="list-style-type: none"> 新旧地形図や統計資料を活用した作業課題を通じて、明治期から現代に至る松戸市の地域の変遷について考察し、理解を深める。
学校周辺地域のフィールドワーク	4時間	<ul style="list-style-type: none"> 都市計画図をもとに学校周辺地域を中心に野外観察を行い、地域の特性を自然環境・社会環境の両面から理解する。 野外観察の成果を踏まえて、地域の抱える課題について発見する。
学校周辺地域における諸課題を考える	3時間	<ul style="list-style-type: none"> クラスを複数の班に分け、グループごとに学校周辺地域の特性について良い点・悪い点に分けて抱える社会的諸課題の背景・要因について野外観察の結果をもとに調査を行う。 調査結果を踏まえて、学校周辺地域を中心とした松戸市の抱えている社会的諸課題をグループごとに抽出する。 課題のもたらす背景・要因、周囲への影響を考え、解決策を提案する。
持続可能な地域づくりを模索する	7時間	<ul style="list-style-type: none"> 各グループが提案した課題の解決策を踏まえ、持続可能な地域とは何かを考え、理想的な地域像とそれを象徴するコンセプトをグループごとに提案する。 各グループが提案したコンセプトに基づき、持続可能な地域づくりの実現へ向けての段階的な戦略プラン立案する。 各グループが立案した戦略プランを全体に発表し、クラス全体で共有する。 各グループの戦略プランについて、行政の担当者（松戸市総合政策部政策推進課）より松戸市総合計画との関わりからコメントを頂き、地域のあり方について考える。
地域政策への提言	1時間	<ul style="list-style-type: none"> レポートの作成を通じて、生徒各自が地域づくりにどのように関わっていくのかを具体的にまとめる。



写真3 ワークショップ型授業の典型例（泉撮影）

参照 url (2023 年 2 月参照確認)

参照 url 1 <https://www.mext.go.jp/unesco/004/1405507.htm>

文部科学省日本ユネスコ国内委員会 (2018) 『ESD (持続可能な開発のための教育) 推進の手引き (改訂版)』について

参考文献

池俊介 (2012) 地理学習における地域調査の現状と課題, E-journal GEO, 7-1, pp.35-42.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ejgeo/7/1/7_1_35/article-char/ja/

泉貴久 (2014) 地理教育における社会参加学習の課題—学校周辺地域を対象とした授業実践を手掛かりに—, 中等社会科教育研究, 32, pp.81-99.

<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/53209>

泉貴久 (2015) 2015 年度科学地理オリンピック日本選手権—三次選抜試験を中心に—, 地理, 60-6, pp.96-101.

泉貴久 (2016a) 市民性育成を視野に入れた「地理総合」学習プランの提案, 地理教育, 45, pp.32-38.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2018s/0/2018s_000057/article-char/ja/

泉貴久 (2016b) 国際地理オリンピックにおける地図作成の過程, 地理, 61-11, pp.50-57.

泉貴久 (2018) 地理的な見方・考え方と市民性育成—探究プロセスを重視した高等学校「地理総合」の授業実践へ向けて—, 江口勇治監修, 井田仁康・唐木清志・國分麻里・村井大介編『21 世紀の教育に求められる「社会的な見方・考え方」』帝国書院, pp.114-123.

泉貴久 (2021a) 国際地理オリンピック (iGeo) に必要な「地理力」とは何か?—日本のこれからの高校地理教育の方向性を考える—, 地理月報, 560, pp.20-23.

泉貴久 (2021b) 学校以外の地域を調査してみよう—農山村を例に—, 大野新・竹内裕一編『地域と世界をつなぐ「地理総合」の授業』大月書店, pp.218-223.

犬井正 (2009) 野外調査のあり方と課題, 中村和郎・高橋伸夫・谷内達・犬井正編『地理教育講座第Ⅱ巻 地理教育の方法』古今書院, pp.319-330.

国際地理オリンピック日本委員会実行委員会編 (2018) 『地理オリンピックへの招待—公式ガイドブック・問題集—』古今書院, pp.132-134

竹内裕一 (2012) 地域調査, 日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』ぎょうせい, pp.116-117.

図と表のページ

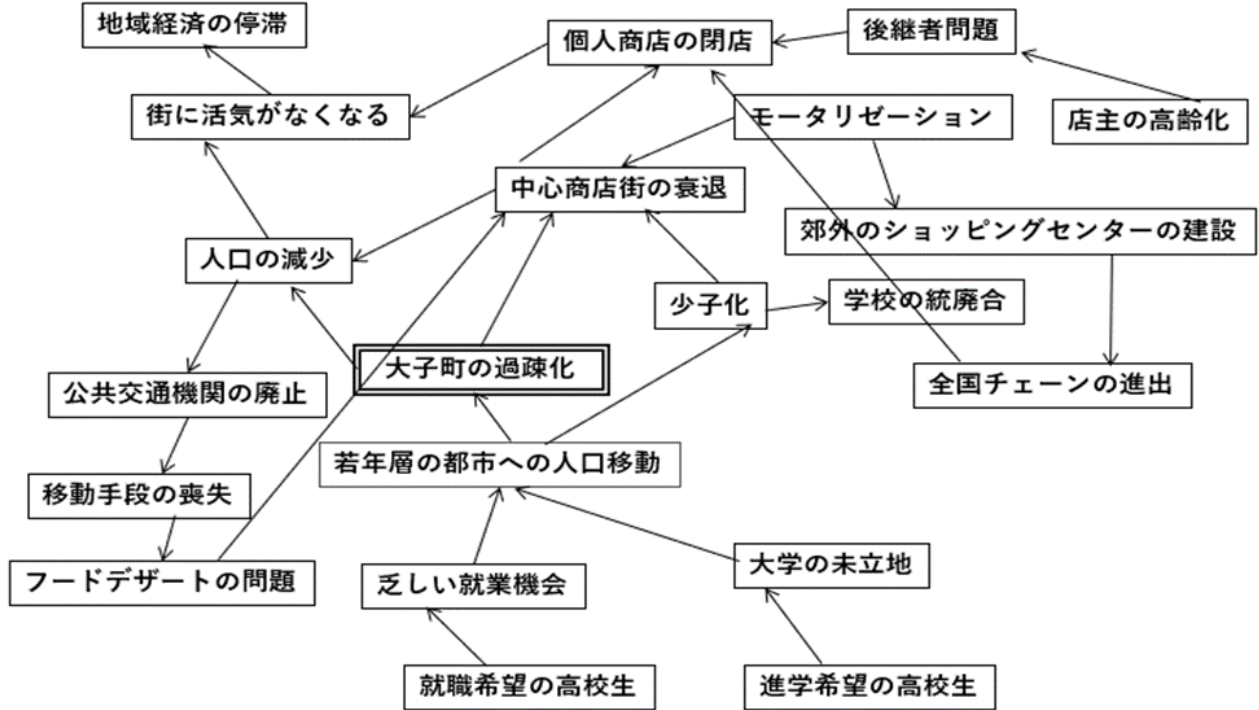


図2 ウェブマップの事例
 (泉2021b) より引用。